

2012年合格目標

TAC 行政書士講座・無料公開セミナー

無料公開セミナー

独学者必見！

「実戦力を高める 効果的な問題演習法」

《セミナーの内容》

1. 行政書士試験の概要
2. 昨年の試験傾向から試験対策を考える
3. 効果的な問題演習法

1. 行政書士試験の概要

(1) 試験要項

(2) 試験科目・出題数

① 行政書士に必要な法令等（法令科目）

60 問中 46 問 — 五肢択一式（40 問）、多肢選択式（3 問）及び記述式（3 問）

② 行政書士の業務に関連する一般知識等

60 問中 14 問 — 五肢択一式（14 問）

(3) 出題形式

① 五肢択一式（60 問中 54 問 — 1 問 4 点）

ex. 次のうち正しいものはどれか。

- 1 ～
- 2 ～
- 3 ～
- 4 ～
- 5 ～

② 多肢選択式（60 問中 3 問 — 1 問 8 点・部分点あり）

ex. ア～エに当てはまる語句を、枠内の選択肢（1～20）から選びなさい。

～～ア～～～～～～イ～～ウ～～エ～～～～～～。

1	2	～	20
---	---	---	----

③ 記述式（60 問中 3 問 — 1 問 20 点・部分点あり）

ex. ～について、40 字程度で記述しなさい。

(4) 合格基準 ⇒ 300 満点中 180 点（6 割）で合格！！

2. 昨年の試験傾向から試験対策を考える

本試験の傾向を踏まえて、を考えてみましょう。

今年の試験では、「問われる条文・判例は基本的＋問われ方は応用形」というパターンの問題が多く出題されました。したがって、あなたが行政書士試験に合格するためにしなければならないのは、**基本的な条文・判例の知識を固めた上で、その知識を柔軟に使えるだけの応用力を鍛えること**です。

「**基本的な条文・判例**」とは、**過去問で出題された条文・判例**です。

過去問（昭和 62 年以降のもの）で出題された知識をマスターすれば、全体の 4 割程度（120 点程度）を得点することが可能です。**過去問で 120 点程度の土台部分を作ります。**それに**過去問以外の「＋α」で肉づけ**します。

過去問以外に必要な「＋α」とは、**過去問をベースに行政書士試験対策用として書かれた教材**です。具体的な内容としては、過去問で出題されたところの周辺（e x. 頻出条文の前後の条文や、1 項が頻出であれば 2 項、頻出判例の出題されていない判旨部分）が「＋α」となります。

ちなみに、TAC 行政書士講座の「基本テキスト」であれば、212 点（現場思考問題を含む）の得点が可能でした。つまり、過去問に加えて、3 割（90 点程度）の「＋α」を補充できるものとなっています。

インプットした「過去問＋α」の知識を使って問題を解けるようにします。
そのためには、問題を解く練習を繰り返します。

効率的に合格するための学習法

- 第 1 過去問をしっかりと学習し、4 割得点の土台を固める
- 第 2 「＋α」部分を積み上げる
- 第 3 積みあがった知識を使う練習、応用力を鍛える練習をする

3. 効果的な問題演習法

（１） 問題演習は知識をインプットしたらすぐに行う。

「過去問＋α」という基本的な法律知識を徹底的にインプットしたら、その都度、問題演習を行います。できるだけ、インプットから問題演習まで時間を空けずに行うことです。このことが正確な知識の定着を促進します。

（２） 具体的な問題演習法

問題の演習は、「正解だった」「不正解だった」で終わるのではなく、問題を十分に分析・検討して、「本試験でも使える正確な知識」を定着させます。

① 曖昧な知識をどれだけ増やしても本試験では使えない。。

本試験では、各選択肢の正確な正誤判断が求められますので、曖昧な知識では正誤判断ができません。なんとなく「○」にしたり「×」にしたり。結局、各選択肢を正誤判断できる確率は50%です。この確率は知識がない場合と同じです。**問題を解いて、明確に「正しい！」「誤り！」と判断できる知識が、本試験でも使える正確な知識ということになります。**

② 出題された問題の半分の選択肢を完全に正誤判断できればよい。

では、行政書士試験で6割以上の得点をするには、行政書士試験問題のうち何割の選択肢を完全に「正しい！」「誤り！」と判断できるような知識があればよいかというと。。。

↓

5割あればOKです。

↓名づけて

「5割完璧知識行政書士試験合格法」です！！

③ 5割完璧知識行政書士試験合格法とは？

5割の正確な知識で五肢択一式54問（216点）中、何問正解できるでしょうか。例えば、「次の記述のうち正しいものを選び。」という問題で、正解が3、半分の肢（2～3肢）は正確に○×をつけることができるとしましょう。完璧に正誤判断できない肢は△とします。

（パターン1）

3つの肢の正誤判断ができ、
その中に正解肢があるパターン。

1. ×
2. ×
3. ○
4. △
5. △

→正答率100%

試験問題の半数27問はこのパターンで正解できます。

（パターン2）

2つの肢の正誤判断ができ、
その中に正解肢があるパターン。

1. △
2. ×
3. ○
4. △
5. △

→正答率100%

（パターン3）

3つの肢の正誤判断ができ、
その中に正解肢がないパターン。

1. ×
2. ×
3. △
4. △
5. ×

→正答率50%

（パターン4）

2つの肢の正誤判断ができ、
その中に正解肢がないパターン。

1. ×
2. ×
3. △
4. △
5. △

→正答率33.3%

残りの27問中、13～14問は2択（パターン3）になり、その半分の7問正解できます。残りの27問中、13～14問は3択（パターン4）になり、その3割の4問正解できます。

したがって、5割の完璧な知識で、五肢択一式54問中38問（216点中152点）、択一式の約7割正解できるわけです。

※ あとは、記述式・多肢選択式84点中28点（約3割）の得点できれば180点クリアです！

※ もちろん、個数問題や組合せ問題もあり、必ずこの確率になるとは限りませんが。

④ 正誤判断を正確にできる知識を獲得するための問題演習法

問題を解いてみて、正誤判断の根拠となる条文や判例を説明できる肢には○や×をつけますが、正誤判断できなかった肢、正誤判断に時間がかかった肢には△をつけます。

【問題 1】誤っているものを選び。

- | | |
|----------------------------|-----|
| 1. → 見たことはあるけど、正誤判断がつかない | → △ |
| 2. → なんとなく正しいと思うけど根拠がわからない | → △ |
| 3. → 1 分間考えて誤りと判断 | → △ |
| 4. → 正しいと判断。根拠判例も言える | → ○ |
| 5. → 誤りと判断。根拠条文も言える | → × |

この問題であなたが正確な知識として持っているのは 2 肢だけこの問題の 40% の知識しかものにしていません。

肢 4、肢 5 は完全に分かっていたので、軽く確認すればオーケー。

肢 1、肢 2、は答え合わせのときに、根拠条文、判例を見直し。条文のどこが誤りに変更されているのか、正しいあるいは誤りと判断するポイントはどこかをチェック。

肢 3 は、なぜ正誤判断に時間がかかってしまったのかを自己分析。知識が曖昧なところを条文・判例でチェックします。

問題には正解したとしても、△の選択肢は知識が曖昧ですから、その肢に関わる条文知識、判例知識は一つ一つ丁寧に確認して、記憶させます。それを何度も何度も繰り返すことで、△の数は減っていき、すべて○×を正確につけることができる知識、本試験でも使える知識が増えていくわけです。

↓

行政書士本試験までに行う問題演習の意義は、問題自体に正解することではなく、自分の曖昧な知識を発見し、その知識の正確性をあげることです。つまり、「△の知識を、確実に○×と判断できる知識にすること」です。ただし、到達点としては、全試験問題のうち 5 割を確実に○×判断できるようになることです。

無駄なく「過去問＋α」となる知識をインプットし、出題される 5 割の知識を完全に正誤判断できるようにすることです。

択一問題解答の注意（択一必勝テクニック）

1. 短い肢から検討

- ① 時間短縮
- ② 正解率を高める

2. 問題文の頭に○×を打つ

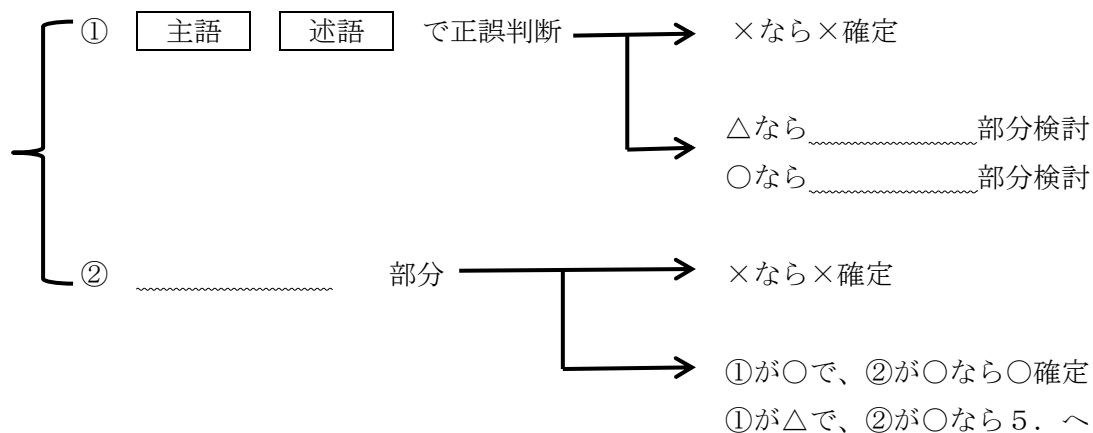
組合せは、肢の上に××、〇〇を打つ

⇒ ケアレスミスを防ぐ

3. 正誤判断のポイントの見極め

⇒ 主語（事例）が長くても、そこに誤りはない。

4. 主語 + _____ + 述語 の構造を押さえる



5. 知識で解けない肢がある ⇒ 肢の意味を吟味して正誤判断してみる

- { ① 論理的におかしいところはないか？
② 原理・原則に照らしてどうか？

この判断をするのに使うため、原理・原則の徹底理解を行う。

わからないからエイヤーではなく、知識がなくても60%、70%という正答率をたたき出せるようになっていく！

2肢で迷った時にも正解できるようになってくる！！